

気象学用語集とその使い方

気象学用語集は気象(学)において用いられる用語を広く採録したものです。学問的な用語ばかりでなく、気象に関係する日常用語も含んでいます。また気象学独自の用語でなくとも、気象関係の本や論文に現れる用語をできるだけ網羅するという目的なので、物理・化学・生物・数学・統計・環境・海洋・雪氷などの気象学に関連する用語も含んでいます。

主として用語(日本語)と英語(もとはラテン語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語であるものも含む)の関係を示しています。従って和訳や英訳の辞書として使うことがもっとも一般的な使い方です。この目的のため、できるだけ使いやすいようにいろいろと工夫しています。用語や英語の後に付いている注記及び備考が参考になるものと思います。また多くの用語が採録されているので、本や事典のキーワードを選び出す際の参考にもなります。**Web** で提供していくメリットを生かして、新しい用語もなるべく早く取り入れるつもりです。このように、本用語集は幅広く使っていただけるものと思います。

当然ながら、これらの用語はひとつの基準を与えるもので、個人の好みまで規制するものではありません。「天気」その他の学会誌の表現はこれに従わないといけないという性質のものではありません。ただしもし好みの問題がなければ、これがひとつの基準になりますので、積極的に活用していただくことを期待しています。

1. 気象学用語集は以下のものからなっています。

(1)基本用語集 和英, 英和

基本用語とは大学教養教育程度以下の用語および一般気象用語(社会的気象用語)を指します。気象学会関係者・専門研究者以外はたいていこの用語集で間に合うと思います。約 1000 語が採録されています。より詳しい情報は「**基本用語集について**」をご覧ください。

(2)用語集 和英, 英和

気象学において用いられる数多くの用語を網羅しています。基本用語も含めています。過去の本や論文を読む際の便宜を考えて、すでに古くなった用語も注釈を付けて採録しています。

(3)略語集

気象(学)では多くの英略語が用いられます。その正確な表現と日本語を示しています。

(4)使用において注意を要する用語

使用において注意を要する用語を特別に取りあげています。古い教科書等には現在では妥当性に問題のある用語などが多く見られます。これらをそのまま使うことは当然ながら大きな問題があります。教科書を執筆される方や気象研究者以外で気象分野を含む本を執筆される方などはぜひ参考にしてください。

(5)別表

以下の5つを別表としています。

(ア)熱帯低気圧の分類

熱帯低気圧の分類を日本語と英語の両方の表記で与えています。日本の分類と国際的な分類は異なっているので注意が必要です。

(イ)雪の結晶の分類

Magono and Lee (1966)にもとづく雪の結晶の分類を、日本語と英語の両方の表記で与えています。

(ウ)風力階級

国際気象機関(WMO)の風力階級表を与えています。風力階級の名称に関しては英語名が決められていますが、試みに日本語の表記も付けています。

(エ)単位について

国際単位系を中心に、過去に用いられてきた単位も説明しています。また単位表記に関する書式も示しています。

(オ)気象学でよく用いられる定数表

気象学でよく用いられる定数を与えています。できるだけ正確な定数の値を示しているのが特徴です。定数の名称に関しては、日本語と英語の両方で表記しています。

(カ)雲の分類

国際気象機関(WMO)の雲の分類を与えています。母雲に関する部分も表記し、それに対する日本語も注釈とともに示しているのが特徴です。日本語と英語の両方で表記しています。

2. 基本用語集と全用語集の和英においては、第1列に用語、第2列に用語の読み、第3列に用語に対応する英語を記しました。例えば、

気象観測 きしょうかんそく meteorological observation

3. 基本用語集と用語集の英和においては、第1列に英語用語、第2列にそれに対応する用語、第3列に用語の読みを記しました。例えば、

front 前線 ぜんせん

4. 和英、英和とも第4列には備考を与えています。同義語、ニュアンスの違いなどを示しています。単に単語のみを示しているものは同義語です。他は文章化しています。

5. 対応する英語がまったくない、ないしはうまく対応しない日本語も採録しています。対応する英語がないという情報も重要な情報であるという意図に基づいています。

6. 和英における英語や英和における用語が複数ある場合も多くあります。日本語と英語は必ずしも一対一に対応しないことも多いので、複数の用語から利用者がより適切と思われる用語を選択できるようにとの配慮から、このような方針をとりました。

7. 配列は、和英においては用語の読みによる五十音配列、英和においては用語に対応する英語の語順ABC配列によっています。

8. 括弧、その他の記号の用い方は、次のとおりです。

(ア) [] 内は省略してよいものを示します。例えば、

alcohol[-in-glass] thermometer アルコール温度計 あるこーるおんどけい

においては、alcohol thermometer も alcohol-in-glass thermometer もともに用いられることを示します。

[]が英語と日本語の両方にある場合は、[]を両方に付けた場合と、[]を両方でとった場合のそれぞれで対応します。例えば

pressure gradient [force] 気圧傾度[力] きあつけいど[りよく]

においては、pressure gradient は気圧傾度と、pressure gradient force は気圧傾度力と対応することを示します。

(イ) () は2つの使い方をしていきます。

ひとつは用語の最後尾でその用語の省略形(雲の省略形を含む。AMeDAS だけは逆に正式名称)を示す場合です。例えば、

low-level jet (LLJ) 下層ジェット(LLJ) かそうじえつと

もうひとつは交換が可能という意味で用いています。例えば、

fine mesh (grid) model 細格子モデル さいこうしもでる

これは、fine mesh model という使い方も fine grid model という使い方もできることを意味しています。

(ウ) 省略形の読みにおいては、特別な読みをするもののみを()内に書いています。書いていないものは普通にアルファベット通りに発音します。例えば、

low-level jet (LLJ) 下層ジェット(LLJ) かそうじえつと

は何も書いていないので、LLJ は「えるえるじえい」と読みます。一方、例えば、

Tropical Rainfall Measuring Mission (TRMM) 熱帯降雨観測衛星(TRMM)

ねったいこううかんそくえいせい(とりむ)

では、読みに書いているように TRMM は「とりむ」と読みます。

(エ) 【 】内は説明ないし注記を示します。例えば、

fall velocity 落下速度【雲粒や雨粒の】 らっかそくど

(オ) →印は参照すべきものを示します。例えば、

あられ → 雪あられ, 氷あられ

(カ) 𠩺 は形容詞的な働きをする言葉として用いる場合の用語の形を示します。例えば、

diabatic 非断熱𠩺 ひだんねつ

(キ) 用語の意味が同じものは連記していますが、その意味が異なるものはそれぞれ

(1), (2), (3) などを冠して掲げました。例えば

discharge (1) 流量【水文】 りゅうりょう

(2) 放電 ほうでん

その他の用法

表記の仕方を示します。日本語を書く際の参考にもなるものと思います。

1. 外国の地名・人名などの固有名詞の読みはもっとも一般的と思われるものを採用しました。
 2. 日本語が英語化して用語に対応する外国語となったものはイタリック体で示しました。例えば、
Kuroshio 黒潮 くろしお
 3. 漢字は以下のように用いました。
- (ア) 基本的には常用漢字を用いました。音訓(常用漢字表の付表を含む)や送りがなも基本的にそ

の範囲で用います。

音訓の例 「梅雨(つゆ)」, 「吹雪」は付表に示されているので, そのまま用います。

「台風の眼」, 「氷柱」は範囲外なので「台風の目」, 「つらら」とします。

送りがなの例 晴れ, 曇り, 向かい風, 持ち上げ凝結高度

(イ) 音訓の例外は次の3つです。いずれも巻を「けん」と読みます。

巻雲 けんうん, 巻層雲 けんそううん, 巻積雲 けんせきうん

(ウ) 常用漢字以外の漢字でも気象用語検討委員会において, 学術用語の中に使用したいものとして, 次の16字の漢字と読み(ひらかなは訓, カタカナは音)を選び, これらの漢字を使って表記しています。

嵐(あらし), 笠(かさ), 痕(コン), 擾(ジョウ), 塵(ちり, ジン), 汐(セキ), 閃(セン), 塞(ソク),

捉(ソク), 堆(タイ), 虹(にじ), 汎(ハン), 斑(ハン), 播(ハ), 湧(ユウ), 麓(ロク)

(エ) 上記以外で, しばしば気象学で用いられる漢字も, ひらかなに加え, 漢字を【 】に入れて付記しています。それらは以下の5字です。

あられ【霰】, かさ【暈】, かすみ【霞】, しゅう【驟】雨(雪), がい【骸】晶

(オ) 漢語の一部をかな書きする「交ぜ書き」のうち, 以下の例は避けています。

ら旋 → らせん, 頭きん → ずきん,

4. 外来語の表記は次の基準によっています。

(ア) 二つ以上の単語からなる外来語のカタカナ表記は以下のようにしています。

単語と単語の間の中点(・)は原則として, 2語からなるものには付けず, 3語以上からなる場合は付けています。また固有名詞と固有名詞の間と, 固有名詞と一般語の間にも付けます。

例	cloud cluster	クラウドクラスタ
	large eddy simulation	ラージ・エディ・シミュレーション
	Indian monsoon	インド・モンスーン,
	Stefan-Boltzmann law	シュテファン・ボルツマンの法則
	Eliassen-Palm flux	エリアッセン・パーム・フラックス

ただし2語からなるものでも長くて読みにくいもの(目安は11文字以上)には中点を付け, 3語からなるものでも, うち2語の結びつきが強いものには中点を付けない場合があります。

例	spiral rainband	スパイラル・レインバンド
	normal mode initialization	ノーマルモード・イニシャリゼーション

(イ) 英語のつづりの終わりの -er, -or, -arなどを仮名書きする場合には, 次の方針によって, 語尾の長音符号「ー」を略しました。

(1) その言葉が, 語尾の長音符号を除いて3文字以上になる場合には, 語尾に長音符号を付けません。例えば,

サーミスタ (thermistor)

(2) 2文字以下の場合には, 語尾に長音符号を付けます。例えば,

放射パワー (radiant power)

(3) 組み合わせた言葉は, それぞれの言葉について, 上記の(1)または(2)を適用します。

(4) 上述の文字の数え方では, (i) 長音記号, (ii)はねる音「ン」, (iii)つまる音「ッ」は, それぞれ1文字とし, (iv)よう音を示す小さい文字を数えません。例えば,

(i) レーダ (radar) (ii) センサ (sensor) (iii) チョッパ (shopper) は、いずれも 3 文字と数えます。一方、(iv) ウェザー (weather) は 2 文字となるので、語尾に長音符号が付きます。

ただし、次の 6 語は上述の方針の例外としています。

リーダー (leader)

スーパー (super)

サンダーストーム (thunderstorm)

トレーサー (tracer)

クアドラチャースペクトル (quadrature spectrum)

氷晶のホイスキー (whisker of ice crystal)

(ウ) -gy, -py などは長音符号を付けます。例えば、

エネルギー (energy)

エントロピー (entropy)

(エ) 以下は次のような表記を使います。

aero～ エアロを主に、エーロも併記する

air エア

data データ

day デー

diamond ダイヤモンド

fax ファックス

low ロー

profile プロファイル

report レポート

shear シアー

(オ) 外国の人名、地名および人名起源の語は慣用によっています。従って(イ)の原則も適用していません。例えば、

チャンドラー潮汐 (Chandler tide), ドップラーレーダ (Doppler radar)

5. 英語のスペルは米国式を用いました。ただし固有名詞はその通りに書いています。例えば、

European Centre for Medium-range Weather Forecasts (ECMWF)

複合語、ハイフネーション、その他のスペルに関することは The Chicago Manual of Style によっています。例えば

streamfunction, semiannual, quasigeostrophic, cold-air outbreak,
wet-bulb temperature

6. アメリカ合衆国の組織名で、National の付くものは、米国と訳しています。例えば、

National Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA) 米国大気海洋庁

National Center for Atmospheric Research (NCAR) 米国大気研究センター